

Title	II 資本における所有
Author(s)	八木, 紀一郎
Citation	経済論叢 (1985), 136(5-6): 603-604
Issue Date	1985-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/134108
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

經濟論叢

第136卷 第5・6号

- 財政家としてのベーム＝バヴェルク(上)……………八木 紀一郎 1
- 多国籍企業と内部化理論(下)……………板木 雅彦 16
- 現代ソ連における中小企業の機能……………溝端 佐登史 31
- 都市計画行政と郊外開発……………川瀬 光義 51
- 19世紀中葉期イギリスのファーニスにおける
地主掌握下の鉄道建設……………阿知羅 隆雄 73

経済学会記事

經濟論叢 第135卷・第136卷 総目録

昭和60年11・12月

京都大學經濟學會

II 資本における所有

京都大学助教授 八木紀一郎

1. 経済理論の領域において、〈所有〉を問題にするということは一体どういうことであるのか。「近代経済社会の運動法則を解明する」ことを課題としたマルクスの経済理論においては、資本が私的所有であるということの認識は、一体どのような意味をもっていたのであろうか。あらためて問いかけてみたい。
2. 資本を、まず生産過程の遂行に役立つ資財（ストック）とみなすスミスの把握は、資本が営利のための資産であることを否定はしないものの、実質的には、その私的性格は経済に影響しないという、「所有ヴェール観」ともいうべきものに帰結した。しかし、

資本を立体的にとらえ、そのなかで、貨幣資本の主動性を承認するマルクスにあっては、スミスのようなオプティミズムは成立しえない。資本は、その循環運動の中でたえず貨幣形態に復帰するのであるが、それは生産要素を購買＝支配する資本形態であると同時に、生産の成果を領有＝総括して循環を終結する形態でもある。この貨幣資本形態を考慮すれば、資本による生産のマルクス理論にも、私的所有の不生産性がくみこまれているものとみるべきであろう。

3. ところが、『資本論』第一巻の蓄積篇でのマルクスの「資本家」論は、理論的な枠組においても古典派をこえるものではない。所有者としての「資本家」の行動は、フローとしての剰余価値の分割の次元ではなく、ストックとしての資本全体にかかわって問題にされるべきである。〈貨幣の資本への転化〉の問題を、資本制生産自体の中でつねに再現する問題として把握されるべきである。

4. 「高利貸し」は、貨幣資産をもって利殖を直接実現しようとした形態であるが、こうした短絡的結合は、「貨幣蓄蔵者の夢」さえ実現していない。資産を安全な形で保有しながら利殖するという、所有者としての資本家の夢は、資本の回転運動の中からうまれる資本の現実的二重化（流通資本・貨幣資本の分離）と、それに並行・促進された資本所有の観念的二重化の進行の中で実現されるのである。こうした資本における所有の展開を、マルクスの金融経済理論として再構成する必要がある。